

防衛大学校本科第13期学生及び理工学研究科第6期学生 卒業式における学校長式辞（昭和44年3月22日）

本日、本科第13期学生及び研究科第6期学生の卒業式を挙行いたしましたところ、佐藤内閣総理大臣^{注(1)}、保利内閣官房長官^{注(2)}、有田防衛庁長官^{注(3)}をはじめ、内外多数の来賓各位並びに父兄の皆様方をお迎えいたしましたことは、卒業学生の喜びは申すまでもなく、学校関係者一同にとり無上の光栄であります。

本日、栄えある卒業をいたします学生は、研究科42名、本科465名であります。

本科の学生は、昭和40年入校以来の4年間を、研究科の学生は昭和42年からの2年間を、この絶好の環境に恵まれた小原台上において、勉学並びに研究に、はたまた体育・訓練に全力を傾倒して精進して来ました。最近とみに熾烈さを加えてまいりました大学紛争等については、当然のことながら何等それらにわずら患わされることなく、すこぶ願る明朗闊達かつ真面目な態度をもって立派にその業を終えたのであります。

私は皆様と共に507名の若人に対し、先ず心から卒業のお祝いを申し述べたいと思います。いうまでもなく、これらの諸君は幹部自衛官、即ちわが国防の担い手としての任務につくべき人々であります。しかし私は、清新澀刺たる若人はその健全な心構えと優秀な能力から考え、ひとり国防の分野のみでなく、将来においては、広く各方面にわたって、わが国発展の中核的推進力として、大きく貢献するであろうことを確信するものであります。その意味においても、これらの若人に対し大きな期待を抱くと共に、かくも前途有為な青年を社会に送りうることは、本校の誇りであると考えている次第であります。



第2代学校長 大森 寛

注(1) 佐藤榮作

注(2) 保利 茂

注(3) 有田喜一

研究科の諸君、諸君は2年間の学究生活を通じ、高度の科学技術の研究に努力されました。従来 of 隊務を離れ、あるいは家庭をよそにしたの勉学は、御苦労も並々ならぬものがあったことと想像します。しかし2年間の研究生活は、諸君の人生にとって貴重な体験であったことと思えます。打ち込んだ研究と教官の指導とによって、得るところも決して少なくなかったでしょう。国防力の整備には、ますます高度の科学技術の必要なことは申すまでもありません。

最近における各種学会からの防衛庁関係者の締め出し、一般大学における制服自衛官の大学院拒否問題等の憂うべき風潮を考えると、諸君に対する期待はいよいよ大きく、諸君の責任は重いとわなければなりません。部隊等に帰任の上は、本校において修得した知識・技能等を活用して、倍旧の御活躍をせられるよう要望いたします。

さて本科の諸君、諸君はただいま陸・海・空の幕僚長から幹部候補生に任命されました。今日から諸君は、自衛官としての道を歩まれるわけです。自衛官の任務は重要な職責であり、全国民は諸君に大きな期待もっています。この栄えある卒業式に臨んで、諸君の覚悟はどうですか。自分の将来についてどう考えていますか。この壇上からみると、すべての諸君が自信に満ち、希望に溢れているように見えます。

しかし諸君の中には、国防問題に関する世論を考え、自分は本当に全国民の支持を得ているのだろうか、内心一抹の不安を抱いている人がいるかもしれません。

先ず、その問題についてお話ししなければなりません。私の気持ちを率直にお伝えするためには、一つの仮定を設けて考えてみましょう。今、わが国に突如不法な武力侵入が加えられたとしたら、それに対し国民はいかに対処をするでしょうか。日清・日露の戦争以降、今次の戦争の時のように、見事な拳国の態勢をとり得るでしょうか。それとも現在の世論を反映して、四分五裂の様相を呈するでしょうか。例えばの話ですが、非武装中立を標榜している人々は、自説を固守して祖国の危機に拱^{きょうしゅ}手傍観するでしょうか。無政府主義や階級的イデオロギーを信じている人々は、それに拘泥してわが国の敗戦を希望するでしょうか。これは一概に結論を出し難いところですが、外国における過去の戦争の歴史等をみるならば、ほとんどすべての国民は平素の主張をすて、祖国のために戦ったことを教えています。日本だけがその例外になるでしょうか。私は、わが国においても同じように期待してよいのではないかと考えています。

戦後、わが国は各分野において大きな変革をとげました。その中でも、国防に対する考え方ほど変わったものはありません。戦前は、国防や軍隊については既定の事実として肯定されていたといえると思います。それに反して現在は、百家争鳴的状况を呈しているといつてよいでしょう。世論の混沌は、諸君にその冷たさを感じさせ不安を抱かせています。しかし諸君は危惧の念をもったり、失望する必要はありません。何となれば、混沌たる世論からは、新しい国防思想の台頭を期待し得ますし、また、祖国の危急に当っては、混沌たる世論にもかかわらず、全国民の奮起を信じてよいと思うからです。

こう考えるならば、はっきり表明されているか否かの違いはあるにしても、諸君の任務は、全国民の支持があるものと考えて差支えありません。万一諸君にして世論を気にして、荏苒無為^{じんぜんむい}に過ごすようなことがあれば、非常の際において、平素は国防に無関心であった人々から叱責されるようなことになるかもしれません。世論の冷めたさは、むしろ諸君の責任を加重するものと考えねばなりません。いうまでもなく、諸君の使命は万一に備えるにあります。今日の平和な時代 多くの人々は平和だと信じています の世論に一喜一憂する必要はありません。諸君、このような国防思想の混迷、世論の冷淡さの中においてこそ、諸君の責任は一層重大であり、自ら祖国防衛の柱とならんとする強い覚悟が必要ではないでしょうか。

次に、私は忠誠心ということについてお話しいたします。諸君は国防の担い手になるのです。それは必要に応じ、武力戦闘に対処する立場に立つということです。この意味において、諸君は昔の武士や外国の軍人と同じように、武人であるといわねばなりません。武人としての生涯を送るためには、武人の倫理を身につけることが必要です。言葉を変えて言えば、国防の担い手としての諸君の職分、職域にともなう倫理、即ち職業倫理を身につけなければなりません。職業には夫々の職業倫理があります。教員には教員の、警察官には警察官の倫理があります。

しかし、職業倫理といっても特別なものではありません。何人も守るべき人間性を基礎とする一般倫理と実体的に違うものではありません。ただ職分、職域の異なるに従って、その重点に差異が生じてきます。国防の任務を立派に達成する立場にある諸君には、固有の実践倫理が要求されるわけです。古今東西を通じ、武人の倫理としていろいろな徳目があげられてきました。例えば、忠誠、勇気、廉恥、責任、服従等々であります。これらは時代に応じ国情に従って変わっています。しかし武家時代

においても、近代日本においても、また外国においても、武人としての職分に根本的な変化がない以上、その基本的性格に変わりはありません。

こういう意味において、今日、自衛官としての第一歩を踏み出す諸君に対し、武人の徳目の一つである忠誠心についてお話しいたします。私が本日、諸君に忠誠心についてお話しするのは、わが国の現状に鑑み、この問題が特に重要だと考えるからであります。忠誠心とは何か、まことまごころです。詳しく言えば、ある対象に対する徹底的な献身の実践です。忠誠心は対象に従っているいろいろなものが考えられます。特定の団体組織に対する忠誠心、ある宗教に対する忠誠心、国家に対する忠誠心、人類に対する忠誠心などがあります。従って忠誠心といっても、国家に対するものだけでなく、武人のみの徳目でもなく、また日本のみの問題でもありません。ましてや忠誠心は、古い過去の概念だと即断してはなりません。忠誠心が最も立派に発揚されたのは、日本の武士道であることは外国人も^{ひと}齎しく認めています。

新渡戸稲造博士は、その名著『武士道』において日本武士道の本質にふれ、「私は武士道に對内的及び對外的教訓のありしことを認める。後者は、社会の安寧幸福を求むる福利主義的であり、前者は徳のため徳を行うことを強調する純粹道德であった」として、武士道の倫理道德性と、武士道が単に特定階級の武徳のみだけでないことを説明しています。また武士道と忠誠との関連について、さらに「武士道の中において目上の者に対する服従及び忠誠は^{せつぜん}截然としてその特色をなし、忠誠が至高の重要性を得たのは武士的名譽の掟においてのみである」と述べております。

明治維新後の陸・海軍人が、武士道の精神的流れを汲んだことは明らかであります。自衛官については、その後の社会的環境の変化と自衛隊のおかれている立場から考えて、武士階級と同日に論じ得ないものがあるのはいうをまちません。しかし武人という特質から考えるならば、忠誠心が両者を通じて重要な基本倫理であることは、むしろ当然あると思います。武家時代の忠誠心と、後の時代の忠誠心との相違は、忠誠心を捧げる対象の変遷に現われています。武家時代には、その対象は藩侯主君でありました。明治以降においては天皇でありました。民主時代の現在においては、天皇を象徴として戴き、全国民から成立っている日本の国と考えるべきでありましょう。

私は、この日本の国に対する忠誠心について特に諸君に考えてほしいのです。何故国家に対する忠誠心は必要なのでしょう。われわれは、日本の国に生れました。日本語を話す人々が共同社会を営んできました。

われわれは生れながらにして、過去から未来に続く日本民族を構成する一員であります。祖先から受け継いだ日本の国をより良いものにして子孫に伝えたいと念願し、その努力を惜しむものではありません。こういう感情は本能的なものであり、われわれの心の奥底から湧き出るものです。他人からおしつけられたり強制されるものではありません。ここに、日本の国に対する忠誠心が生れます。即ち国民が各々運命共同体の一員であり、その繁栄を願い努力を惜しまないという自覚から生れてくるものです。国家に対する国民の忠誠心は国家存立の基礎です。最近、日本民族の一員としての誇りを失い、あるいは、その立場を否定せんとする人を見受けます。またある意図の下に、故意に歴史をゆがめて解釈しようとしたり、古来の伝統を無視し、甚だしきはそれを破壊しようとする人々もなしとしません。そういう人々は、遺憾ながら国家に対する忠誠心を期待し得ないものであります。マルキシズムの勃興以来、世界の思想界に大きな変革をもたらしたことは事実であります。自由主義国の中で、わが国は最も強くその影響をうけているといわれます。

思想は常に進化します。従って今後さらに多くの変化が発生するでしょう。遠い将来においては、国家の存在を超越する世界人の時代が到来するかもしれません。しかし過去の歴史から考えれば、人類社会は、それぞれの国家を中心に生活を営んでいる現在の状態が永く継続するものと認めざるを得ません。国家の存在意義を以上のように考えるならば、国家に対する忠誠心をもつことは当然であります。そして自己の存在を超えた民族、国家に対する忠誠心は、自己犠牲による自己達成の実践であって、倫理的・道徳的に重要な意義を有するものと思います。

自衛官は国家、国民の平和と安全を守る任務を有します。非常の際には、身の危険を顧みず使命に挺身すべき立場にあります。この意味において、武人としての道を歩まれる諸君にとって、職業倫理として要求される忠誠心は、一般国民よりも、また他のいかなる公務員よりも重いといわなければなりません。

私は、国防に関する現今の世論と、ますます拡大する大学紛争等に見る最近の社会的風潮とに鑑み、諸君が特に国家に対する忠誠心に深い関心をもたれることを切望してやみません。これは一人私のみではなく、諸君を支持し諸君に期待する全国民の要望でもあると信じています。

これをもって式辞といたします。